

フランスにおける日本仏学史

文献・資料 富田 仁

一九七四年七月二日から九月六日まで、ふたたび訪れたフランスの地で、メルメ・ド・カシオンを中心に日本仏学史研究に必要なフランスの文献・資料を採訪する機会にめぐまれた。以下はその採訪記録の概要である。

調査・蒐集した文献・資料は三大別で語る。

一、幕末の外交史上、レオン・ロッシュの通訳として活躍した宣教師カシオンの来日以前の経歴

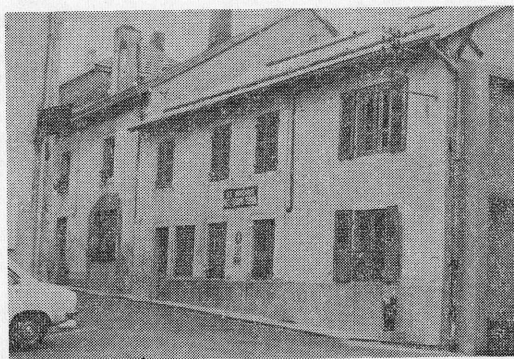
二、日本に最初に來たフランス人で長崎で殉教したギヨーム・クルテの生地とその伝記・研究に関する文献・資料

三、パリのモンパルナス墓地にある入江文郎ほか明治の日本人の墓

なお、日本人として最初にフランスを訪れた支倉常長に関するカルパントラのアンギャンベルティヌ図書館所蔵文書も閲覧した。

以下、便宜上別々に調査過程を記すが、実際には平行的に採訪が進められていたことを断っておきたい。

(1) メルメ・ド・カシオン Mermet de Caehon



カシオンの生地、レ・ブーシュー

パリ第五区バック通り一二八番地 (128 Rue du Bac, Paris) の海外布教団 Missions Etrangères de Paris でジャン・ゲノオ Jean Guenau 神父からみせてもらったカシオンの経歴に関しての小さな一葉の記録カードによると、カシオンは一八二八年九月十一日ジュラ山中のレ・ブーシュー Les Bouchoux 聖堂区に生まれ、サン・ク

ロードの神学校から一八五二年七月十一日パリ海外布教団に入り、副助祭、助祭、司祭と順調に昇進し、一八五四年八月二五日パリを

出発し、日本に向いた。ちなみに、カシヨンのその後の経歴、活動がカードに記載されている。私はこれをノートしたあと、ゲノオ神父からアドリアン・ロネー著『パリ海外布教団協会報』Memorial de la Société des Missions Étrangères par Adrien Launay. Tome II 1916. のカシヨンの項の記事を見せられた。大要は前記カードと同じだが、カシヨンの著作とカシヨンに関する文献書誌が添えられていたことは有益であった。カシヨンの著作としては、

(1) 「ブイヌ」起原、言語、風俗、宗教」

Les Aïnos, Origine, Langue, Mœurs, Religion —— Mesnel, libraire, 128 Rue du Bac, au coin de celle de Babylone, Paris, 1863, in-8 pp. 20.

(2) 「養蠶秘録」〔上垣伊兵衛守国・原著（一八〇三年）〕

Il modo di allevare i bachi da seta al Giappone opera del testo giapponese di Ouekaki Morikouni, tradotte muovamente in francese da Mernnet de Cachon, etc, e dal francese volta in italiano con analoghe osservazioni da Isidoro dell'oro e pubblicata per cura della Società agraria di Lombardia

aggiunto un trattatello scella coltivazione del Yama-mai o baco della guercia.——Tipografia del pio istituto di parsonato, Milano 1865, in-8° pp. xv-48.

(3) 「佛英和辞典」

Dictionnaire français-anglais-japanais (Je japonais en caractères chinois-japonais, avec sa transcription en caractères européens), publié par les soins de A. le Gras pour la partie anglaise, et de L. Pagès pour la partie japonaise.——Firmin

Didot, 56 rue Jacob, Paris, 1866, in-8 pp. Ⅳ—440.

以上の三冊である。いずれもパリ国立図書館に所蔵されている（請求図書番号(1)8°0° P.3. (2) S P.5546. (3) X.28917）。

ただし、「養蠶秘録」はカシヨンの仏訳本をイタリア語に重訳したものをさらに別のフランス人によってフランス語に訳されたもの、すなわち “De l'Éducation des vers à soie au Japon, ouvrage traduit du texte japonais de Ouekaki-Morikouni, par Mernnet de Cachon, premier interprète de la légation de France au Japon reproduit en italien sur l'aversion française par Isidore Dell'oro... traduit de l'italien par L-N. Péroul. Saint-Marcellin (Isère), J. Vagnon, imprimeur-éditeur 1866.” がパリの国立図書館にあり、カシヨン仏訳本の所在はいまのところ確認されていない。上垣守国の原書『養蠶秘録』は日本各地の養蚕技術を絵入りで集大成したもので、一八四八年にマチュー・ボナフーもほぼ完全なフランス訳を出版している。ボナフー訳とカシヨン訳・ペクール重訳のフランス訳を比較検討した結果、両者はそれぞれ原書から直接訳出していることが認められる。ペクール訳は原書の抄訳で絵は一切省かれている。

さて、カシヨンの生地が判明したので、八月十八日朝八時十四分、私はパリのリヨン駅から急行列車に乗り込み、ムシヤール Mouchard で鈍行列車に換え、サン・クロード Saint-Claude 駅に十四時二十六分に到着した。スイス国境に近いジュラ山中の駅前には車一台見当らず、十分ほど歩いて中心街に出て、まずこの夜の宿を探した。郵便局前のレストラン兼ホテルに旅装を解き、マダムに頼み、レ・ブリーシェへのタクシーを手配してもらったが、どうも出払ってタ

クシーはつかまらない。聞けば、レ・ブーシューまではバスも通っていないし、片道二十キロほどの山道では歩いても行けない。私は途方に暮れ、きょうはサン・クロード見物で時間をつぶし、明日にも手段を講じてレ・ブーシューにたどりつこうと考え、カテドラルに詣でた。カシオンも祈りを捧げたカテドラルの荘厳な内陣で、私はふとある考えを思いついた。急いで外に出て近くの僧房に足運んだ。ここで調べられることがあれば調べておこう。ひょっとするとなにか収蔵があるかもしれない。だが、あいにく若い神学生ふうの青年がいるだけで要領をえない。レ・ブーシューの司祭スジュール Cûré Seurre の名を教えてくれたにすぎない。オート・ストップでレ・ブーシューに行けばよいという無責任なことを口にする男だった。いささか腹がたったが、礼を述べて外に出たところ、幸運にも一台の小型タクシーが空車で走ってくる。レ・ブーシューに行ってくれるかと訝ねると、運転手は黙ってうなづく。タクシーは町をはずれるとすぐさま細まっていく山道を幾度もカーブしながら上って行く。霧が濃くかかり始める。数メートル先しか視界がきかなくなり、いささか不安になってくる。やがて小さい聚落に入った。レ・ブーシューの道標がみえた。どこを訪ねたらよいか。教会堂が見える。会堂前の広場に小さい像が建っている。カシオンの像？ 違う。大戦で戦死した兵士のための像だ。車から下りて、教会堂の入口に近づく。扉を開けようとする。が、固く閉まっている。べつな入口を探してみようと教会堂を回りかけると、いつしか教人の子どもが集まってきていた。司祭はスイスに行っていないよ、とひとりが云う。折角こんな山中まで来たのに、司祭が不在とは。落胆した私を見て、タクシーの運転手は一軒の家に入って行き、間もなく、ひ

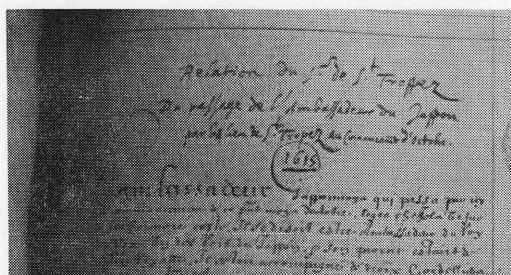
とりの主婦らしい女性と出て来た。教会の書記の家にこう、と女性も乗込み、車を走らせた。そこも不在だった。主婦はあと二、三十分もすれば戻るから待つようにと云う。仕方ない。待つほかない。言葉通り、三十分ほどしたとき、一台の小型乗用車が姿をみせる。書記がひとりの神父と下りてきた。事情を説明する。書記は私が神父と話している間に、教会堂の方に駆け出して行った。やがて分厚い書籍状の書類綴を抱えて戻ってきた。洗礼記録だ。カシオンの洗礼名、父母の名などが記録されているページを探し出したとき、私は全身にこれだけで十分だというような満足感がみなぎりわたるのを覚えた。実際、それ以上のことはなにも判らなかった。神父は別れに際して私のカメラに書記と並んで収まってくれ、アドレス (Père Vuillemoz La Pesse. 39370 Les Bouchoux. または 3 Rue de la Sous-Préfecture 39200 Saint-Claude) を記してくれた。

神父の話では、メルメ姓はレ・ブーシューや近くのベッス Besse には少なくないが、カシオンの縁者が現存するかどうかはいまは判らないという。カシオンの両親の名は判明したが、職業など詳しいことは調べられなかった。歿年にしても、一八七一年頃という程度しかあきらかではない。多分、歿した土地ニースでも調べれば新しいことがなにかわかることだろう。

(2) ギヨーム・クールテ Guillaume Courtet のこと

八月二五日(月)私は今回の旅行の一つの目的であるギヨーム・クールテの生地セリニャン Serignan 訪問に先だって、途中南フランスのアヴィニョン Avignon に一泊し、ほど近いカルパントラ

Carpentras のアンギャンベルティヌ図書館 Bibliothèque Ingulbertine (11 Boulevard Albin Durand, 184 Carpentras) に支倉常長に関する文書を閲覧することにした。朝八時にアヴィニョンからバスに乗り、カルパントラに着いたのは九時少々前だった。図書館はまだ門が閉ざされていた。門前の掲示では、月曜日は午後二時から開かれることになっている。私は午後にはセリニャンに発つ予定だったので、掃除中の係員に事情を話して、文書の閲覧を願った。三十分後、掃除がすむ頃に来るようにと特別の処置をとってくれた。



支倉常長記録文書（カルパントラ）

一六一五年十月初旬、イスパニアからローマに向う途中、悪天候

のために南仏サン・トロペ St Tropez に二、三日間滞在した支倉常長に関する文書がこの図書館にあることが知られるようになったのは一九四〇年の頃のことである。いまでは『大日本史料』（第十二編之四五）にも翻訳されている。アンギャンベルティヌ図書館には Catalogue général des Manuscrits des bibliothèques publiques de France, départements — Tome xxxv, Carpentras par MM. Duhamel et Liabastres, Tome II (Paris, Librairie Plon 1899) 244v^o Fol. 252. Relation du

Sr de St-Tropez du passage de l'ambassadeur du Japon par le lieu de St-Tropez, au comancement d'octobre 1615 の請求記号と標題で保管されている。六ページの羊皮紙にぎつちりペン字で埋められている。一九四〇年七月、中村拓氏が Monumenta Nipponica に内容の紹介をされていることを知っていたので、ぜひともこの眼で見ておきたかったのだ。

私は文書のコピーをとり、カメラにも収めたあと、バスでアヴィニョンに引き返し、わずかに四分間ほどの乗換時間に、駆け足でホームに到着中の列車に飛び乗り、ニーム Nîmes に向った。ニームでは、前回の渡仏のとき撮り洩らしたアルフォンス・ドーデ Alphonse Daudet の生家の写真を大急ぎでとった。そして、ふたたび列車に乗り、ベディエ Béziers へ赴いた。ギヨーム・クールテの生地へはバスの便があったが、一時間半あまり待たなくてはならないので、ベディエ駅前からタクシーをとばすことにした。片道二フランで行ってくれるというタクシーの運転手の車は地中海方向へスピードをあげて走った。遠く教会堂の塔がみえてくる。あれがセリニャンだと教えてくれる。日本に最初に来たフランス人、ギヨーム・クールテの像が鎮座する教会堂前の広場にタクシーが到着すると、それを待ち受けていたかのようにひとりの老人が扉を開けた。運転手はエストゥールネ司祭だと紹介してくれた。まず、司祭は教会堂の内部を案内してくれ、クールテ殉教の絵姿の掲げられている片隅に連れて行ってくれた。殉教者の絵、各種拷問の説明などもある。セリニャン教会刊行のパンフレット「長崎の殉教者たち」Saints Martyrs de Nagasaki はクールテの生涯を簡潔に記した手ごころな解説書だ。エントールネ司祭の責任編集である。



ギョーム・クールテ像（生地・セリニャン）

司祭は今夜僧房に泊るようにとすすめてくれ、夜になって、ベディエの円形競技場で催されるホリデー・オン・アイスにも招いてくれた。夏の夜空の下に繰りひろげられた氷上の祭典を私はアノラック着用という姿で見物した。月光に美しく映える氷と色彩豊かな衣裳は私の旅の疲れをいやしてくれた。夏の夜風は涼しすぎたが、快

かった。

翌日、司祭はクールテに関する文献・資料をみせてくれ、ご自身いまそれらを整理して一巻の書にまとめる予定だと話してくれた。

必要な資料はノートしてもよい、カメラに撮してもよい、と司祭は寛大に資料を提供してくれたが、私は司祭の教えてくれた文献名をメモし、わずかな個所をノートしただけで、司祭に別れを告げた。

司祭の研究・著作に必要な文献・資料をそのままコピーすることになぜか拘泥するものが私の心に生まれていたのだった。

パリに戻ってから、そのときに知りえた文献をパリ国立図書館に通って調べ、複写した。クールテ伝を日本仏学史の観点で書くに必

要な文献は集められたようだ。つぎに、主要な文献名をパリ国立図書館請求記号をつけて記しておこう。〔括弧内の記号はパリ国立図書館請求記号である。〕

(1) Relation envoyé nouvellement des Indes, de la mort glorieuse du R. D. Guillaume Courtet, traduit de l'espagnol — Tolose, imp. de P. D' Esley. 1641. [Ln^{er} 5040]

(2) Notice sur le V. P. Guillaume Courtet, par M. Jules Courtet. — Avignon. imp. de Gros frères 1868. [Ln^o 24837]

(3) Les Saints & Les Martyrs du Diocèse d' Albi, par L'Abbé H. Salabert. — Toulouse, Edouard Privat. 1886.

[8° Ln^{er} 59] (パリ国立図書館蔵版は一八九二年再版本で、クールテに関する記述は第二巻二一〇～二二三ページにみられる。)

(4) Le premier Français martyrisé au Japon au vie de vénérable Guillaume Courtet, Religieux Dominicain par L'Abbé G. Tarniquet — Imprimeurs des Facultés Catholiques de Lille. 1891. [8° Ln^{er} 40251]

クールテに部分的に言及している文献は少なくともはない。たとえばレオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』（吉田小五郎訳・岩波文庫）Léon Pagès : Histoire de la Religion chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu' à 1870 などがある。

(3) モンパルナス墓地に眠る日本人

入江文郎。明治初期の仏学者でオーギュスト・コントの理解者であった入江文郎は一八七八年一月、パリの客舎で病死した。従来、パリのモンパルナス墓地に埋葬されたことは記録にも残されている

が、その墓の所在は不明とされていた。入江家でもそれを知らないようであったので、今回のパリ滞在中にぜひとも在処をつきとめてみたいと考えていた。たまたま同じくパリ滞在中の高橋邦太郎共立女子大学教授が墓地管理事務所で調べられ、ある日曜日、私を誘われて入江文郎の墓に詣でた。

墓地の監視人のひとりが入江のほかにも二人の日本人の墓所があることを教えてくれ、鮫島尚信と萩原正倫の墓に案内してくれた。たまたま日本人旅行者夫妻も墓地見学にみえ、写真を撮ろうとしていたところを監視人に注意されて困っていた。それを見て、高橋先生がチップをわたすようにすすめた。すると、たちまち案内を申し出、私たちに同行したのである。フランス人気質の一端がみられて面白かった。

鮫島は日本全権公使であり、外交史上の一人物であるが、萩原の方は無名であり、最初日本の詩人のいとかだという話であった。朔太郎の縁戚かもしれないと考えると、この人物の身許を調べてみたくなった。墓地の管理事務所に行き、埋葬記録の閲覧を求めた。受付のマドモアゼルが親切にもメモしてくれたことはつぎのようである。()内は墓地整理記号。

◎ Iré Fumio (46 ans) Inhumé le 1^{er} février 1878. V^e du 6^e arrond^e sous le n^o 235 [Cap. N^o 195 — 1878]

◎ Hagiwara Masatomo. Inhumé le 11 janvier 1902. V^e du 9^e arrond^e sous le n^o 49 [Cap. N^o 4 — 1902]

◎ Sameshina Naonobou (36 ans), Inhumé le 7 décembre 1880. V^e du 16^e arrond^e sous le n^o 1069 [Cap. 2741 — 1880]
つぎに、私は埋葬願いの出された第六、第九、第十六区の各区役

所に赴き、死亡証明の請求手続をとった。

その結果、萩原正倫は朔太郎とは関係のない貿易商で、一九〇二年一月十日に若冠三三才でパリに死んだことが判明した。死亡届は林忠正から出されていた。以下は入江の証明書。

Acte de décès

Du premier février mil huit cent soixante-dix-huit à dix heures du matin, acte de décès dûment constaté de Fumio IRÉ, professeur de Philosophie, décédé en son domicile à Paris rue Casimir Delavigne 7 avant hier à sept heures du soir, à l'âge de 46 ans, natif de Ismo - Japon - Célibataire, fils de..... et de..... sans autres renseignements sur la déclaration faite par Seigo — Crizuka étudiant en droit âgé de 23 ans, demeurant à Paris rue des Feuillantines 61 et Kounwanio Kumasaki attaché à l'ambassade du Japon, âgé de 25 ans, demeurant à Paris avenue Joséphine 75 qui ont signé après lecture avec Nous, MAIRE DU VI^e ARRONDISSEMENT DE PARIS -

POUR COPIE CONFORME

PARIS, le 22 AOUT 1974

LE MAIRE ADJOINE

OFFICIER DE L'ÉTAT-CIVIL

パリ滞在中、私は村上英俊のレジモン・ドヌール叙勲に関する記録を叙勲局で調べたが、記録はなかった。中江兆民のバリの足取りをパリ警視庁に探そうとしたが、やはり記録なしというところだ。百年という歳月はあまりにも長い日々であったようだ。